

追悼文

豊くん、ありがとう

櫻田喜貢穂（7組）

宮原豊君が亡くなった。高校同期の畏友であり、故郷の会「東京青木会」の盟友であった。

まことに残念である。覚悟はしていたが、いざ逝かれてしまうと呆然としているだけの自分がある。まだ悲しみの実感はない。追悼文を書くべき立場にあることは十分承知しているが、書くべきことがありすぎるような気がして、何を書くべきかわからない。

分かっていることと言えば、彼は名前のとおり、豊かな人生を送ったということ。まことに見事な人生であった。

青木村で育っていたころ、かめやのキクオちゃん・ますやのユタカちゃんは、村では何かと注目される子どもだったから、ユタカちゃんはなるべく目立たないように振舞っていた。キクオちゃんは後ろ指をさされないように「優等生」を演じていた。高校に入って嬉しかったのは、そうしたくびきが外れたことだ。と、豊くんと話をしたのは、50をいくつか過ぎたころだった。

それから四半世紀ほど、豊くんと付き合っていたわけだが、豊くんが病を得た2018（平成30）年ころから徐々に付き合いは濃密なものになった。その時期は、ちょうど二人が「東京青木会」の運営を任された時期と一致する。頻りに顔を合わせることになり、飲酒歓談の機会が増え、意見交換がなされるわけだが、私が彼の話の拝聴することが多かった。とにかく博識であり、何事にも自説を持っていることに驚嘆した。博識であるが故か、話し始めると止まらないのにはいささか困った。やがて私は、話を止めることを諦め、ひたすら聞き入ることにした。彼は説明するのが好きなのである。好きだから上手である。聞き手が関心を持ち始めると、彼の話は次第に面白くなってくる。

彼にとっての人生最後の1月は、緊急入院したものの退院の目処が立たず、極めて厳しい状況にあった。パソコンの前に座っての作業が不可能になったため、病床から、東京青木会のホームページの管理者を私に変更すべく、変更作業の指示が飛んできた。読者のメーリングリストは、二女のなつ子さんに指示を与え、私に送信されてきた。1月下旬、何とか管理者の変更ができると、毎日のように電話があり、スマホからメールが入った。体力が徐々に衰えつつあ

ることが感じ取れたが、それでも連絡してくれることが嬉しかったから、電話にもメールにも極力対応した。

最後のメールは、1月31日、「珍しい写真をスマホの写真帳から見つけたので、ご紹介します」と、父上が編纂した「中村誌」（中村というのは、青木村が成立する前に存在した旧村の一つ）の編纂委員会の写真を送ってきたものだった。私が「中村誌」に関心を持っていることを承知していて、「中村誌」編纂の事実をホームページの読者に知らせてほしいという趣旨である。

彼はギリギリまで知的作業を行った。最後まで知の世界に生き、知識・経験を分かち合おうとした。



宮原君と筆者

彼の電話でのラストメッセージは、「主体的に楽しく生き抜いた、悔いはない」というものだった。

豊くん、きみと出会えてよかった。

長い間付き合ってくれて、ありがとう。

(2026年3月10日記)

以上